

■ 倶知安町全体の景観特性の捉え方

- ・ 1949年に羊蹄山が支笏洞爺国立公園に、1963年にニセコ連峰がニセコ積丹小樽海岸国定公園が指定されことにより、倶知安町は農地・市街地を囲うように美しい自然が守られ、昔と変わらない風景が作られています。
- ・ 倶知安町の景観特性を把握するため、倶知安町の景観を創り出している大切な要素を5つに整理します。要素として、土台には羊蹄山や河岸段丘、四季などの「自然・地形」、その上に畑地や水田などの「産業（農業）」、道路や市街地などの「まちの基盤」、町民の営みなどの「暮らし・産業」が重なり合っています。
- ・ さらに、町民を始めとする倶知安町に関わる全ての「人々の愛着」や過去から現在へ引き継がれてきた「文化」が、自然・地形、農業、まちの基盤、暮らし・産業までを守り、育て、創っており、倶知安町の景観を形成していると言えます。
- ・ 大切な視点として、現在目に見える要素のみを把握するのではなく、現在の景観に影響を与えている要素ごとの歴史的な背景や変遷を理解した上で、景観特性を把握します。

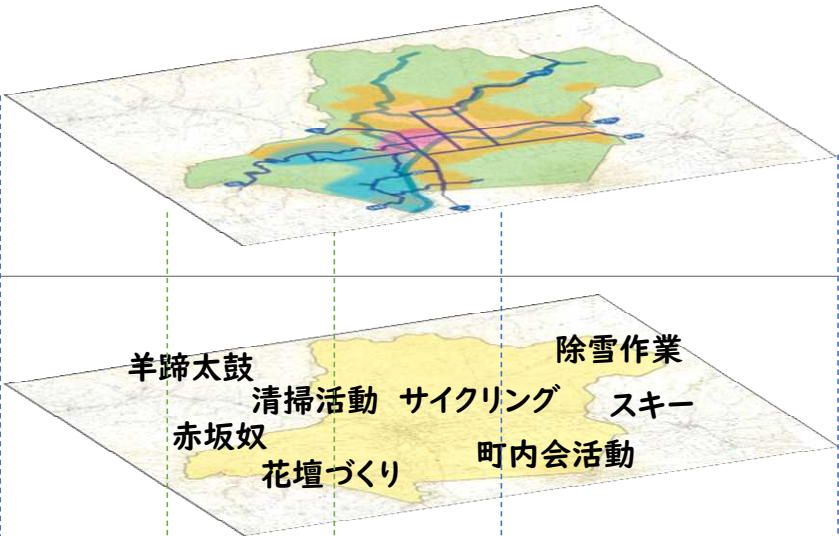
【倶知安町の景観特性を把握する要素階層】

■ 倶知安町の景観特性

自然地形や生業、都市形成、暮らしなど、個々の要素における歴史や取組が積み重なって魅力的な景観が形成

5. 人々の愛着・文化

町民や来訪者など町に関わる全ての人が愛着を持って行う活動、愛着を育む倶知安らしさが表れる文化の要素



- ・ アンケート結果
- ・ 小中学校校歌
- ・ まちづくり活動
- ・ 伝統・行事
- ・ スポーツ・アクティビティ

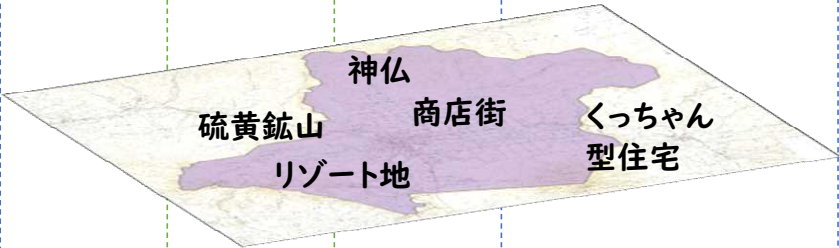
● 歴史的変遷（一部）

- ・ 明治45年にレルヒ中佐一行がスキーによる羊蹄山登山を実施。
- ・ 昭和8年に赤坂奴が小樽～狩太町（現ニセコ町）を経て町へ伝えられる。
- ・ 昭和38年より名前を変えながら「じゃが祭り」を開催。
- ・ 昭和38年に高田緑郎氏が「羊蹄太鼓」を作曲。その後太鼓の技術が伝授、継承。
- ・ 町内会が中心となって沿道の花壇づくりや清掃活動が続けられている。



4. 暮らし・産業

倶知安町の生業等の暮らしや産業の特徴から、現在の景観につながっている要素



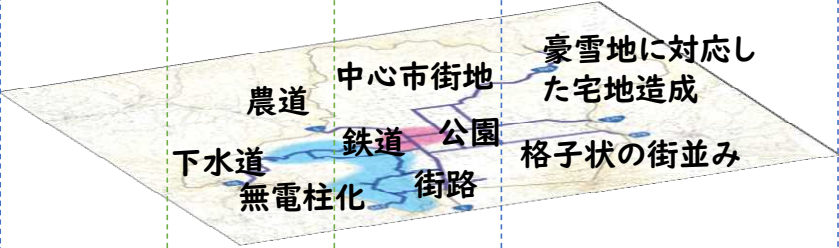
- ・ 商業
- ・ 観光
- ・ 産業遺産
- ・ 神社仏閣

- ・ 明治前期からマッチなどの化学工業が盛んに。その材料となるイワオヌプリ北側に硫黄鉱山が開山。昭和12年に閉山。
- ・ 明治から大正期に入植者によって各農場内などに設けられた神社。まちの発展とともに、合併・合祀を経ている。
- ・ 明治40年に駅前通が開通し、商店が形成。
- ・ 昭和36年にニセコ高原比羅夫スキー場がオープン。平成16年ごろからヒラフ地区でホテルなどの中高層建築の計画が急増。
- ・ 平成24年より地域特性に応じたくっちゃん型住宅を推進。



3. まちの基盤

道路やまちの区画割、公園、住宅地など都市が形成される中でできた要素



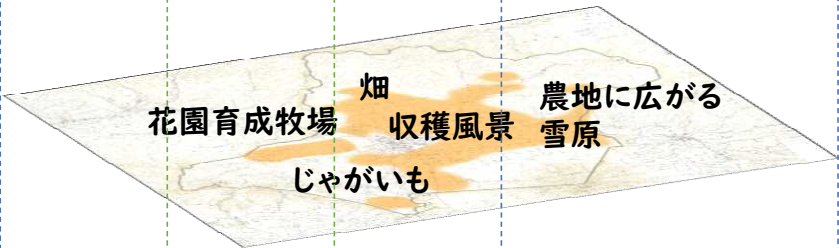
- ・ 中心市街地
- ・ 準都市計画区域
- ・ 交通
- ・ 公園

- ・ 明治26年に倶知安村が設置。その後基線3号線に村の中心市街地が成立。
- ・ 明治37年にJR倶知安駅が開業し、格子状の市街地が形成。
- ・ 明治40年、基線6号線及び基線9号線沿いに中心市街地が移動。
- ・ 大正5年に調整を施行。倶知安町となる。
- ・ 昭和24年に都市計画法により都市計画区域に指定。
- ・ 平成20年に準都市計画区域が指定、景観地区の決定。



2. 農業

倶知安町の基幹産業である農業が創り出す景観の要素



- ・ 畑作
- ・ 稲作
- ・ 酪農

- ・ 明治25年、第一移住者真鍋浜三郎他5名が入墾。ジャガイモや大豆、小豆など食料自給のため作付けを始めた。
- ・ 明治28年になると開墾が急速に進み、ナタネや大豆などの作付け面積が急激に上昇。
- ・ 澱粉製造がブームになる大正期にジャガイモの栽培が盛んになる。
- ・ 大正10年頃から水田への転換が盛んになる。



1. 自然・地形

倶知安町の景観の骨格となる自然環境や地形などの要素



- ・ 気象
- ・ 地形
- ・ 河川
- ・ 植生
- ・ 動物

- ・ 羊蹄山は3回の大きな噴火と寄生火山などの噴火や爆裂があったにもかかわらず、山体が大きく崩れることなく数万年間その姿を保ち続け、美しい山容を見せているところに、名勝としての存在感がある。
- ・ ニセコ連峰は火山活動により10万年前には現在の山列が形成。
- ・ 尻別川や支流倶登山川の流れによって河岸段丘と沖積地が形成。



■各会議で出された景観特性に繋がる「キーワード」(抜粋)

【第1回検討会議 令和2年7月15日】

- ・ 倶知安駅から見る街並みは好ましくないが、羊蹄山の魅力がある
- ・ 冬のスキー場などの景観は素晴らしいが、夏場の市街地とのギャップがある
- ・ 目の前に羊蹄山・ニセコ連峰があることは倶知安町最大の魅力
- ・ 「暮らしの姿」が景観。「景観」は住む人の身だしなみであるという考え方もある。
- ・ 「どういう暮らしを目指すのか」という視点で議論を進めると、個々人の「良好な景観」への共通認識に繋がる
- ・ 積雪を考慮した建築など「暮らしやすさ」が「美しさ」につながることもある
- ・ 「羊蹄山」「豊かな森林」「農地」の3つによって景観が構成されているなど、景観構造の明確化により、保全の方向性が分かりやすくなる など



【第2回検討会議 令和2年8月5日】

- ・ 河岸段丘と格子状の農業景観の組み合わせは町の特徴の一つと言える
- ・ 河岸段丘の斜面緑地と農地の繰り返しが特徴的
- ・ 生産緑地が点在する風景が実に秩序だっており、自然に寄って生まれた色彩や模様が大切な景観を形成
- ・ 旭ヶ丘公園から見ると町の地形が良く分かる
- ・ 人がいないと街並みも景観も成立しない。まず地域をどう活性化するか考える必要がある
- ・ 植物の繁茂によって川面が全く見えない場所があり、川面を景観に取り込みたい
- ・ 景観に対して意見を云うだけでなく、花壇の草取りをするなど活動し、景観に関わることで、愛着も湧く など



【第1回市街地景観検討部会 令和2年9月10日】

- ・ 老朽化した建物が多いが、これらをどのように見栄え良く見せるかが課題
- ・ 通りごとに個性がある。それらの持ち味を引き出す工夫があると街歩きも楽しい
- ・ 駅前通りは電柱のせいで道路の広がりや狭いと感じる
- ・ 旭ヶ丘公園から市街地が見える風景が大切。羊蹄への眺望も美しい
- ・ 草が繁茂しているが河川も重要な資源
- ・ 軟石の石造倉庫は歴史的で味わいのある建物であるため、活用できないか
- ・ 繊維の鉢を使った花植えや緑化は町の特色の一つ
- ・ 小路に個性的で賑わい感が外に見える店ができている(3軒効果に繋がる) など



【第1回景観地区検討部会 令和2年9月11日】

- ・ 倶知安のようなレベルのスキーリゾートは、日本に他にない
- ・ スキーリフトに近いエリアや高速道路の新設を見据えた地区の新たな開発が懸念
- ・ 交通渋滞も大きな課題で、景観は暮らしという広い視野で考える必要がある
- ・ 河川は人工的な整備が多く、自然に調和するような意匠になっていない
- ・ 開発側が目立つということを目的に建築を立てた際に、結果として街並みに統一感が無くなっている。
- ・ 水源や温泉は限りあるものなので、今後重要課題として考えていくべき
- ・ 歩道にはみ出した繁茂した植栽は、しっかりと管理すべき など



【第2回景観地区検討部会 令和2年9月25日】

- ・ ひらふや泉郷、羊蹄の里は当時開発した事業者が門や垣根をつくらないという自主規制を作り、今も続いている
- ・ 尻別川と羊蹄山までの白地地域は何かしらの規制を設けるべきだ
- ・ 特に道路に面した長く開発していないオーナーのいる土地は、雑草の繁茂などの課題がある
- ・ 開発により森林が切り倒されている現実を見ると緑地率の確保などが必要と感じる
- ・ 色や高さについては、何かしらの規制が必要
- ・ 川の魅力が見えないことが残念。ひらふには渓谷のような景観がある など



【第3回検討会議 令和2年10月19日】

- ・ クリーンなまちは観光客にも感動を与えており、街灯もLED化し、明るく安全なまちができている
- ・ 外からどう思われるかではなく、地元に住んでいる方が楽しく安全に暮らせることが大切であり、観光はそれらを見に来る人たちなのである
- ・ 現在の景観を将来の子供たちに残していくためにどうしたらいいのかを話し合う必要がある
- ・ まちの景観について町民の意見を聞く場が必要であり、意識醸成、啓発をさらに行うべき
- ・ 短期的に住む住民に対する「景観を大切にすまち」のアプローチも必要である
- ・ 劇的に変化しないように保全していく地区とリゾート化していくべき地区と棲み分けを考える必要がある など



【第2回市街地景観検討部会 令和2年10月20日】

- ・ 一律でルールをかけることは難しいので、ゾーニングと役割分担が必要。駅前通りの軸においてはある程度の高さを抑えるべきである
- ・ 高さ制限を決めるのではなく、現在の幅員を生かしてセットバックするなど、眺望やヒューマンスケールに配慮してもらうルールとすることが必要
- ・ 羊蹄山を望む眺望点を設定し、そこからの眺望を保全するという考え方が適している
- ・ フォトスポットとなるような場所を設定することも効果的である
- ・ 石蔵倉庫の並びの街並みが大切である。「石蔵を越えた高さのものは建てない」のようなルールも考えられる
- ・ 賑わいや潤いのためにも緑化は必要であり、駅前広場のイメージが駅前通まで続く連続性をみどりで演出できるとよい

【第3回景観地区検討部会 令和2年11月10日】

- ・ 駐車スペースの確保をルール付けているが、実際は冬期の雪置き場となって使えない場合も多い
- ・ 駐車場や緑地や雪置き場が足りていないという課題があるため、建蔽率の見直しが必要であり、さらにみどりを残していくためのルールも設ける必要がある
- ・ 最低敷地面積のルールを見直し、面積のある建物には一定の緑地を確保するルールがあってもよい
- ・ 賑わいづくりにつながるようなビジョンを景観条例の中でも触れられるとよい。1階に店舗を入れるルールや人の拠点となるような広場を設置するような方法がある
- ・ 今後さらに観光客が増えることを想定すると、エリア全体のキャパシティのコントロールが必要



■ 各会議で出された景観特性に繋がる「キーワード」(抜粋)

【第3回市街地景観検討部会 令和2年12月11日】

- ・駅前広場については、駅舎とコンセプトを合わせながら、駅前通りとの連続性を考えたい。
- ・賑わいの拠点とするのか、落ち着きのある空間とするのかなど、シーズンごとのそれぞれの使われ方を含めて、役割や方向性を整理していくことが必要である。
- ・一律に高さ制限していくよりも、羊蹄山が見えるところからの眺望を守りながら、魅力を損ねないで経済活動を回していくような視点が必要である。
- ・駅前通りでは、これからお店が建っていくことを想定して、歩いていて楽しいという街並みをつくっていくことが必要であり、そのための約束事を今から決めていくと良い。



【第4回景観地区検討部会 令和2年12月22日】

- ・すでに建物が過密に建っている地域において開発容量をコントロールするには、現行の建築ルールを変更するのは難しいと思う。
- ・緑化や雪、駐車スペースの確保などの敷地の使い方の視点によるルールを設定すると効果的ではないか。
- ・森林、農地で形成されているエリアについて、手つかずに見えるところでも投資の手が付いているところが多い。みんなが少しずつ我慢して森林が残るように全体の開発密度を下げていくような保全の方法を考える。
- ・賑わいづくりのためにも、建物1階にカフェやショップなどの開けた店舗などが入ると良いが一方で、利益を考えると難しい点もある。



【第4回検討会議 令和2年12月25日】

- ・春夏秋冬をキーワードに景観特性について整理を進めて行くと、より倶知安町らしさが出るのではないか。
- ・特に観光面では、夏にどれだけ人を呼べるような魅力的な景観をつくれるかという視点も大切である。
- ・開拓の時代から現在を比べると変わってしまったものもあるが、歴史的・文化的に重要な資源もまだある。
- ・まちの成り立ちや歴史の視点から景観を整理することで、さらに魅力に対する理解が深まるのではないか。



【事後ヒアリング 令和3年1月14日・1月15日・1月18日】

- ・理念は町民の方のこれからの倶知安町の景観づくりへの思いが込められていくものだと思う。
- ・「倶知安らしい景観文化を育み続ける」というのが基本理念になる。全部ひっくるめて一つの言葉で言えば、「倶知安スタイル」で表せられるのではないか。
- ・近年の開発に囚われて、経済のことだけを考えるのではなく、「現在の当たり前のこの景観をそのまま残したい」という強い思いがある。
- ・羊蹄をシンボリックに扱い、山があって川があって、そこに広い農地がある景観を印象付けてはどうか。
- ・守る、残す・活かす、伝えるというフレーズがあるといい。「守る」は倶知安のことを知ることが必要ということである。また「残す・活かす」は町民がそれらを知って活用すること、「伝える」というのは学校教育や、町の人に伝えるなどを意味する。

■ 倶知安町の景観をつくる要素や資源

(1) 自然・地形がつくる景観要素や資源

羊蹄山やニセコ連峰をはじめとする雄大な山々と清流尻別川などの良好な水辺環境があります	・支笏洞爺国立公園に属する羊蹄山は、公園の大部分が道有林であり、森林資源が保全 ・ニセコ積丹小樽海岸国定公園に属するニセコ連峰はスキー場をはじめ、自然を生かしたアクティビティの拠点 ・市街地は、尻別川、倶登山川、河岸段丘によって囲まれた沖積地上に形成 ・尻別川、倶登山川、ポンクトサン川など、河畔林がつくり出す、水と緑の織り成す良好な水辺環境 ・総面積の約65%を占める森林は、広葉樹（イタヤカエデ、ナラ、ダケカンバ等）が多く分布し、夏の緑、秋の紅葉、冬の枯木など、四季によって山並みの風景が変化	 	オールシーズン	グリーンシーズン(春・夏・秋)	ウィンターシーズン

(2) 農業がつくる景観要素や資源

羊蹄山を背景とした四季の移ろいを感じられる雄大な風景は、住んでいる人・この町で育った人のそれぞれの「原風景」「ふるさと」を象る要素となります。	・地域の酪農業を支える広大な牧草地(242.3ha)が広がる町営花園育成牧場 ・丘陵地に畑地が広がり、遠景に見える羊蹄山やニセコ連峰とその山裾の樹林を背景に四季折々に変化する眺め	・特産品の馬鈴薯をはじめとした畑作中心の作物 ・初夏、丁寧に育てた農作物が一面に青々と生育 ・馬鈴薯の、品種によって異なるピンク・黄色の花の絨毯 ・早朝から夜間までハーベスターなどで農作物を収穫する作業の様子 ・自然の恵みを感じられる農地脇に積まれた収穫コンテナ	 	・冬は農地に一面真っ白な美しい雪原が広がる。 ・春は営農を早めるために積雪深い農地に黒い融雪剤がいたるところに散布	

(3) まちの基盤がつくる景観要素や資源

JRや国道5号を中心としてまちの骨格が形成されています。今後も新幹線駅の開設や高速道路ICの延長が予定されています。	・直線の道路、基盤の目(格子状)に形成された街区はすっきりとした街並みを形成 ・街区を形成する町道の多くは10.90m(6間幅)と堆雪幅を考慮した広めの生活道路空間を形成 ・豊かな暮らしにつながる、街区公園や旭ヶ丘総合公園などの多様な公園が点在 ・街灯のLED化による夜でも明るく、安全な道路		・町全体が一面真っ白の世界になる、しんと雪が降り続いた翌朝の光景 ・早朝に町道をくまなく機械除雪することによる、車道・歩道空間が確保された安全な移動環境 ・地域の堆雪場として利用される市街地内の空き地 ・歩道除雪でできた背丈を超える雪かべの中を歩く子どもたちの光景 ・積雪で狭くなった道路で譲りあう光景	

(4) 暮らし・産業がつくる景観要素や資源

人々の営みや商業、工業、観光業などの産業は昔から姿を変えながらも歴史が積み重なり現代に繋がっています。	・自然素材の活用を促す「くっちゃん型住宅ガイドライン」に示す倶知安らしい住まいづくり ・神社仏閣、産業に関する遺構などまちのおいたちを感じられる資源が点在 ・駅前通りに形成された商店街の賑わい ・国際的なリゾート地として魅力的で多様な施設が一体的に形成したニセコひらふ地区 ・ニセコアンヌプリには、町内に2つのスキー場を形成 ・アクティビティだけでなく、豊かな食と安全な滞在環境が整ったリゾート地	・夏は尻別川のラフティングやスキーコースを活用したフロートレイル等、自然環境を生かした多様なアクティビティが展開 ・自然を感じる広い道路、山あいの険しい峠、リゾート地、市街地など、変化に富む道路環境がサイクリストを魅了 ・冷涼な夏季の気候と身近な自然環境による避暑地としての長期滞在環境		・冬季間は特に賑わいを見せるニセコひらふ地区 ・「建築物に関する指導要綱」により、隣地との間隔をとり落雪飛距離を確保した、豪雪地ならではの宅地形成 ・良質なパウダースノーに魅了した、多くの国内外観光客のウィンタースポーツに興じる姿 ・宝石のようにキラキラと輝くスキー場のナイター照明	

(5) 町民の愛着や文化がつくる景観要素や資源

羊蹄山やニセコ連峰、自然環境に対する愛着が育まれ、清掃活動などのまちづくりの取組や文化活動が行われています。	・羊蹄山やニセコ連峰の景色を見て季節を感じたり、日々の天候の変化を予測したり、心の中で当たり前のように山々を意識した生活 ・おいしい水などの暮らし、スキーなどのアクティビティ、肥沃な農地から収穫される農産物、多くの観光客が訪れる状況、どれもが良質な自然環境の上に成り立っていることが町民の財産 ・羊蹄太鼓は、先人の思いや羊蹄山、山に登る人々を表現し、開拓の精神や当時の暮らしを今に伝える文化の一つ	・町内会や事業者による清掃活動など、自主的な環境維持の取組による住みよい環境の維持 ・町内会が積極的に取組む花植えや花壇づくりによって創出される日常の暮らしの潤い		・半年以上付き合う「雪」によって、除雪時の助け合いなど、他者への優しさ・思いやりを育む文化が自ずと醸成 ・明るくたくましい雪国の生活を目指した町技「スキー」を子どもから大人まで楽しむ姿